



学校だより

松葉小HP



1月号 No. 9

令和8年1月8日

台東区立松葉小学校

校長 松尾 敦

Tel 3841-2627

今年もよろしくお願ひします

校長 松尾 敦

昨年12月、青森県東方沖地震が発生し、八戸市では年末の帰省や旅行客を迎える準備が大変な状況となりました。また、北海道・三陸沖後発地震注意情報が発表されました。結果的に解除されたとはいえ安心しきれない年末年始を過ごした方も大勢いたことと思います。一日も早い復旧・復興をお祈りいたします。一方で約2週間の冬休みを過ごした松葉小の子供たちは、どんな年末年始だったでしょう。今年の恵方は「南南東」です。2学期終業式には、歳神様がやって来るとされる恵方を向いて書き初めをするとよいことがあると話しました。松葉小関係者の皆様、今年もどうぞよろしくお願ひいたします。本日、3学期の始業式で元気な子供たちと再会しました。どんなに寒くても正門前で元気に朝のあいさつをする子がいます。全校児童に広がるよう、今年も正門前に立って働きかけます。

さて、令和8年は午年です。馬というと美しい毛並みにたくましい筋肉、かわいらしい目が特徴で、疾走する姿は美しく、見とれてしまいます。古来より人や荷物の運搬、農耕など人間の生活に身近な存在でもあります。「馬込（まごめ）」や「駒場」、「馬橋」といった馬の名を冠する地名も数多く、日本各地の民話にも出てきます。それでは、日本の民話などで「馬」はどのように描かれているのでしょうか。

○「吉四六話～馬の話～」 大分県の民話

山で焚き木をたくさん拾った吉四六さんは、連れてきた馬の背に全部乗せ、歩いて山を下ります。馬が疲れている様子を見た吉四六さんは馬をかわいそうに思い、焚き木を二束ほど代わりに背負ってやりました。しかし吉四六さんはそのまま馬の背に乗ってしまいます。馬は前よりも大変な思いをしながら歩いていますが、吉四六さんは馬のためによりことをしたとご満悦の様子でした。

○「白い馬の話」 静岡県民話

貧しい暮らしの若者が、白馬が金色の粟を口に咥えて荒れ地に現れる夢を見ました。目が覚めてその荒れ地に行ってみると、夢で見た白馬が現れ、若者に金色の粟の穂を渡します。神のお告げだと信じた若者はその穂を植えて育てました。やがて粟はたくさん実って若者は大金持ちになり「粟の長者」と呼ばれるようになりましたが…。

○「スーホの白い馬」 モンゴルの昔話

スーホという歌の上手な若者が白い馬を拾って連れ帰り、大切に育てました。王様の主催した馬の競走に出場して優勝した白馬は、白馬を気に入った王様に奪われてしまいました。追い返された若者を追うように白馬も若者の家に戻りましたが…。2年生の国語の教科書にも長年載っている名作です。

人の役に立つ馬、神様の化身の馬、人と分かり合える馬など、いろいろな馬が登場しますが、それだけ人間にとって身近な動物であることが分かります。ちょっと間抜けな吉四六さんのようだと笑われてもめげずに、子供たちと日々まじめに勉学に励み、地域・保護者の方々と手を携え合いながら、今年も松葉小を盛り上げていきたいと思っています。関係者の皆様、改めて今年もお力添えよろしくお願ひいたします。